

Exkurs : ティリッヒと平和の神学

< 内容 >

- 1 . はじめに ティリッヒと世界大戦の世紀
- 2 . 課題としての平和の神学
- 3 . 現代における平和の基盤と可能性 希望と待望
- 4 . むすび

1 . はじめに

- 0 . 「平和の神学は可能か？」(日本基督教学会第 53 回学術大会シンポジウム「平和の実現 21 世紀神学の課題」発題)『日本の神学』45、2006 年 9 月 日本基督教学会 pp.233-237.
- 1 . ティリッヒと戦争体験(二つの世界大戦)
 - 二度のカイロスの経験と「聖なる空虚」
 - 従軍牧師として
 - ワイマール時代・宗教社会主義者
 - 戦時ラジオ放送「アメリカの声」のための講話の執筆
 - Ronald H. Stone and Matthew Lon Weaver (eds.)
 - Against the Third Reich. Paul Tillich's Wartime Radio Broadcasts into Nazi Germany*, Westminster John Knox Press, 1998.
 - 民主的ドイツ推進協議会
 - 戦後冷戦下、ベルリン防衛
 - 抑止力としての核の肯定と核投下への反対
- 2 . 課題としての平和の神学
- 3 . ティリッヒの神学から平和の神学を構成するという研究テーマ
 - 基礎論と状況判断との区別あるいは関連
- 4 . 最晩年のティリッヒの到達点
 - 信仰的現実主義から愛・力・正義についての存在論的考察へ
 - 1920 年代から 1960 年代に至るティリッヒ神学の展開の軌跡
 - 現代の歴史的コンテキストでの平和論
- 5 . ロナルド・ストーン編 『パウル・ティリッヒ 平和の神学 1938-1965』
 - 芦名定道監訳 新教出版社 2003 年

2 . 課題としての平和の神学

- 6 . 「地上の平和」について (1965 年)
 - ・1965 年 2 月 18 日、民主主義的制度についての研究センターの会議において発表され

た「<地上の平和>(Pacem in Terris)について」と題した文書。

・共感と批判。プロテスタント的伝統とヒューマニズム的伝統の両者から出発した神学者として。プロテスタント神学者であると同時に実存主義的哲学者として。

7．回勅の意義(宗教的および政治的な思想史における重要な出来事)。正義の究極的な原理、すなわち、万人の人格としての尊厳の承認。ユダヤ人、プロテスタント、ヒューマニストにおける基本的な一致の存在。

8．回勅の第一の問題点

回勅を規定している原理についての合意が西洋のキリスト教的ヒューマニズム的文化圏に制限されており、本質的にはそれを越えていかない。

多数の文化集団と異なった宗教的伝統の存在。個人の尊厳という原理は必ずしも究極的なわけではないという事実。原理を押しつける試みは、たとえそれが外見的に勝利を導いたとしても、無駄なことである。

9．第二の問題点

個人の尊厳を侵害する人々に対する集団的な抵抗という問題。戦争を除いては人格の尊厳を守ったり確立したりできるものは何もないような状況の存在。

10．第三の問題点

力を武力や権威と同一視してはならない(こうした同一視は回勅のいくつかの言明においてなされている)。力の構造(存在するものの基本的な質)。

力と力が出会うとき、そこには対立と同様に一致が生じ、そして対立は強制のための武力の使用へと通じる。力をもった集団の関係においては、正しい強制というものがあるのだろうか。正しい戦争？

核の炎の前では勝者も敗者もないという事実によって妥当性を失っている。

11．第四の問題点

政治集団(権力の中心を有し、政治的に行動できる社会集団)と個人との類比(集団の擬人化)とその危険な帰結。

もし、政府が社会全体の意志決定の中心と見なされるならば、個人はそれに抵抗する権利を持たないことになる。これはもっとも確実で、もっとも頻繁に用いられる専制政治への道である。個人の権利と義務を集団の権利と義務へと直接に適用することはできない。

12．「地上の平和」に対するいかなる現実的な希望にも限界がある。

人間の本性と歴史の特性。生の両義性。 信仰的「現実主義」!

13．「善なる意志を持ったすべての人間に」訴えかけるということはすべきではない。善と悪の両義性という現実気付いているすべての人間に訴えかけなければならない。

まとめ：「地上の平和」(平和の神学)の構築のためには、現実主義的態度(宗教的多元性、現実の正義の両義性、力をめぐる諸問題)と適切な理論化(力と正義の存在論的社会的分析)が必要である。

14．真正な希望をユートピア的な期待の区別という問題。「信仰的」現実主義!

15．希望に対するイスラエルの意義。希望についての古典である旧約聖書は、破れては復活する希望の歴史である。その基盤はまず第一には神の行為を信じることであり、第二

にはそれに対する人間の正しい応答への確信である。

16. 現代における希望の困難さ。

科学技術の進歩の希望とそれに対する失望。歴史的現実の両義性 懐疑主義。

17. シニシズムを超えて。希望なきところに希望を求め、危険を冒す勇氣。

3 . 平和の基盤と可能性

18. 歴史神学としての神学的平和論

希望（真の希望と偽りの希望の区別） 信仰的現実主義

平和から遠い現実の中で、いかに平和へ向けてなおも神学するのか

現実から遊離した幻想・幻滅でも、現実への埋没でもなく

イデオロギーとユートピアの二者択一を超えて

19. 我々が希望する権利はどこにあるのか（1965年）

「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じた。」

ローマの信徒への手紙四章十八節

20. 希望はあらゆる患者には容易で、賢人には難しい。すべての者は愚かな希望の中で自分自身を見失い得るが、本物の希望はまれであり偉大である。では、我々は本物の希望と愚かな希望をどのようにして区別できるのだろうか。

21. 愚かな希望

単なる希望的観測。

「民族的な傲慢さ、権力への意志、他の民族についての無知、彼らを忌み嫌い恐れること、神とその約束を民族自身の栄光のために使用すること。そのような希望は我々自身の国〔アメリカ〕にも現存するが、それは愚かな希望である」、「我々自身の善性についての幻影であり、他者のイメージの歪曲」。

22. 純粋な希望があるところでは、我々が希望するものはすでに何かしら存在している。

希望されたことは、ここにあると同時に、ここにはない。希望されたものの始まりが欠けているところでは、希望は愚かである。

23. 希望されたものが萌芽としてではあるが、現前している。

24. < 真正な希望の基礎・萌芽 >

第一の基礎：核の脅威とその相互破壊の恐怖

第二の基礎：空間の征服による人類の技術的な統合。諸宗教の出会いにおいては、真正な信仰の別の可能性を開くものである。

第三の基礎：国家やイデオロギーの枠を越えた協力。

第四の基礎：集団に向けられる共同体的なエロス。

< 現代史の三つの偉大な出来事 >

民主主義的形態（人間の平等な尊厳）、社会主義的な原理（経済的な平等）、民族自決（抑圧された民族の解放）

25. われわれは希望することができるだけだ（われわれは予測することも知ることもできない。不確かさは残る）。

平和と正義が統治する歴史の最終段階を希望することはできない。歴史内における正義と平和の最終段階がわれわれの希望できるものではない。それでもわれわれは、時間

の特定の瞬間における悪の力に対しての部分的な勝利を希望することができる。

26. 希望することはしばしば待つことを含む。待つことは忍耐を要求する。さらに忍耐はそれ自身のうちに静けさを要求する。

27. 待望の神学（信仰の現実主義 = 待望の現実主義、

glaubiger Realismus, Realismus der Erwartung、『社会主義的決断』1933）

怠惰に受動的に待つことと、自らを開いて受け入れつつ待つこと。

怠惰に受動的に待つ人は、彼が待っているものの到来を妨げる。静かな緊張のうちに出会うかもしれないものに心を開きつつ待つ者は、その到来のために働く。

2Pe 3:12 das ihr wartet und eilet zu der Zukunft des Tages des HERRN, an welchem die Himmel vom Feuer zergehen und die Elemente vor Hitze zerschmelzen werden!

4 . むすび

29. 歴史の内部で待望されるべき「地上の平和」は、完全な平和という最終段階ではない。

人類の目標は、歴史のそれぞれの特定の段階において人間に可能なものを創造すること。

断片的な平和への勝利は、時間と空間における永遠の顕現なのであり、「それは旧約聖書と新約聖書の人々の言葉を用いるならば、神の国の到来である。永遠が時間と歴史の内に出現するときはいつでも、人類の希望は今ここに存在する」。

30. 永遠への参与はばらばらの個人に与えられるのではない。それは、他の人々との、人類との、すべての生きているものとの、存在の神的根拠に根差す存在するものすべてとの統一のなかにある者に与えられるのである。

宇宙的キリストあるいはエコロジカルな平和